

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01759

研究課題名(和文) ろう児への手話を支える身体のエクリチュール性 - 文化的環境としてのろう保育者の意義

研究課題名(英文) The parole as archi-écriture of the body to support sign language to Deaf children - the significance of the Deaf childcare professional as a cultural environment

研究代表者

西岡 圭子(西岡けいこ)(Nishioka, Keiko)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：10237670

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「音声言語」対「手話言語」の二項対立図式を越えて進む試みである。伝統的な言語学を方法論とする「手話言語学」は、「手話言語には文字がない」と判断した。しかし、デリダとメルロ＝ポンティの思索によれば、空間的であるだけでなく時間的に、間 - 身体的な表現である手話こそ、原エクリチュールとしてのパロールに他ならない。成人ろう者によるろう児の教育は、文字のある言語の世界に人間のおとなが子どもを導いていく原型である。この視座からの現象学的記述を通して、成人ろう者がろう児に必要な不可欠な文化的環境であることの自明性を論じた。

研究成果の概要(英文)：This research is an attempt to go beyond the binary confrontational diagram of “spoken language” versus “sign language.” “Sign language linguistics,” which uses traditional linguistics as its methodology, judged that “sign language has no letters.” However, according to the ideas of Derrida and Merleau-Ponty, sign language is not only spatial but also temporal and inter-bodies expression in “parole” as “archi-écriture.” The education of deaf children by adult deaf people is a prototype in which human adults guide children into the world of languages with letters. Through a phenomenological description from this viewpoint, we discuss the fact that adult deaf people are indispensable cultural environments for deaf children.

研究分野：教育方法学

キーワード：デリダ メルロ 身体的パロール 原エクリチュール 絵画表現的身体 物語り 手話 ろう幼児教育

### 1. 研究開始当初の背景

ろう教育を担う公立の特別支援学校(以下、ろう学校と表記)の幼稚部に、手話に堪能な成人ろう者が保育者として勤務することは近年では珍しくないが、それは、聴者の補佐役を期待されてであることが多い。ろう・難聴の幼児たち(以下、ろう児たちと表記)とのコミュニケーションが、聴こえる保育者以上に円滑であっても、である。近代学校の重点課題は文字教育であり、ろう学校でも小学部に進級すれば一般の小学校と同じ教科書を用いる授業が始まる。教科書の文字は、聴者の音声言語を記する「表音文字」である。その読み書き能力の育成を、音声言語のネイティブ・スピーカーである聴者が主導する教育が本格始動する。この慣例を背景に、幼稚部の保育も聴者を中核として行うことが伝統的には当然視されてきた。こうした「音声中心主義」に抗し、ろう者は聴者とは異なる「ろう文化」を有すると主張した運動が、日本では前世紀末に、文化的多様性を求める世界的潮流を背景にして起こった。欧米に倣ったカリキュラムで義務教育も成人ろう者が手話で担う私立学校も、一校、実現され、「手話言語条例」の全国各地での制定が「手話言語学」を論拠に推進されている。だが「手話言語学」を中核として「ろう文化」を主張する戦略は、諸刃の剣でもある。独自の文法構造をもつとして示される手話は、幼少時からろう者集団に身を置かなければ体得できない繊細な言語であって一般的な聴者には敷居が高く、敬して遠ざける心情も生じさせる。人口内耳手術が過大な期待を集める昨今、言語獲得の基盤を音声に置いて聴者がろう児の保育を主導する傾向は概して強固である。

### 2. 研究の目的

本研究は、音声言語 VS 手話言語、聴者の文化 VS ろう者の文化、の二項対立を脱構築する試みである。「手話言語学」は手話を言語と認定した功績を云々するが、伝統的な言語学の枠組みで身体的パロールを分析したので、「手話には文字がない」と判断した。文字を持たない文化は人類史上いくらでもあるから、手話を軽んじる判断ではない。だが留意すべきは、言語学が、デリダが喝破したように、絶対的ロゴスを一方向的に伝達する媒体とみなした音声的パロールを尊重する西欧形而上学の伝統内の学であり、文字とは表音文字でしかないことである。これに対し本研究が機軸とする「エクリチュール」は、上記のように批判したデリダが、実際のパロールの只中に他者たちに開かれた限りない意味生成を導く原エクリチュールの始動を認めて西欧形而上学を脱構築したことに準じている。デリダにおけるパロールのとらえ直しは、わが国の大森荘蔵の「ことだま論」に通じる。大森も、ことばを絶対的ロゴスを伝達する媒体としての声だとはとらえない。人間が全身体的「身振り」で相互的に相手に

触れて動かすことに支えられているのが「ことば」であり、「身振りから引き離して分離した声振りという状態はない」と、大森は述べる。本研究はこの「身振り」の視座でパロールをとらえ直し、全身体的パロールの原エクリチュール性を先鋭的に開示している言語として、「手話」を解する。この理解はさらに、デリダに先立つメルロ＝ポンティの思索にも依拠している。人間はつねにすでに、空間的のみならず時間的に他の人間たちに開かれた身体であることにおいて、一般的な動物とは異なる、とメルロ＝ポンティはとらえた。人間はまずは身振りで、世界のありさまを他者たちと共有的に分節化する。身振りは、そのまま記憶される間身体的なカタチであり、文字というカタチの共有も可能にしていく。発声が一方向的に他の身体に届いて拘束力を発揮することに比べると、身振りは、発せられる方向に視線を向けなければ感受できない。その点を重視すれば、音声と不可分なものとして言語を規定すべきであるようにも思われる。しかし、人間が時間的他者たちに開かれた身体であるのなら、見えたりありさまの共有を志向して互いにまなざしを交わし合っているのが、本来的である。この本来的な在り方において模倣的再現に供された身振りが、音声使用に先立って、世界を共有的に分節化した、とみなすことは正当であろう。分節化されたのは必然的にひとつの全体的出来事である。全体的出来事の共有的カタチ化の分節化に先立たれて、その内を細分化する単語的カタチの共有も可能になった。そうした現象を記述することが、身体的パロールが原エクリチュールであることの具体的把握に他ならない。本研究は以上のような発想から成人ろう者とろう児の全身体的で相互的なふるまいを記述し、成人ろう者がろう児に必要な文化的環境であることの自明性を論じた。こうした本研究の内容は、およそわたしたち人間が、言語で分節化された世界に子どもを導く原型的ありさまに迫ることを目的としている。

### 3. 研究の方法

#### (1) 身体のエクリチュール性を敷衍するキー概念

成人ろう者とろう児との相互的なふるまいを記述するために、身体のエクリチュール性をふたつのキー概念で敷衍した。ひとつは、メルロ＝ポンティの思索( Merleau-Ponty : La prose du Monde, p.60-160)(Merleau-Ponty à la Sorbonne- résumé de cours 1949-1952, 1988, p.513)に基づく「絵画表現的身体」である。いまひとつは、メルロ＝ポンティとも呼応するわが国の哲学研究に依る「物語り」である。人間の身体使用には、世界についての知覚的ゲシュタルトを間主観的に共有する「表現」を出現させ、記号を構成して「制度化」の土台をすえる第一次的

表現の水準がある、と、メルロ＝ポンティはとらえた。「表現」として出現するのは、まずは身振り表現、次いで絵画的表現、そしてより抽象度の高い言語記号表現である。「制度化」とは、理念的意味の次元が限りなく新たに創設され続けていくダイナミズムを記述するために、メルロ＝ポンティが創設した概念である。理念性は共時性と通時性を兼ね備えねばならないが、彼は理念性を、彼岸的・絶対的に在るのではなく此岸的・躍動的に生成するもの、彼の言では「制度化」されるもの、としてとらえる。その可能性の根拠としてメルロ＝ポンティが見いだすが、人間が空間的のみならず時間的な他者たちに開かれた間身体的存在として、世界に臨在しているありさまである。この存在様式が、直接的なコミュニケーション場面のパロールをも原エクリチュールにする。こうした視座からのふたつのキー概念である。以下、具体的に述べる。

#### 絵画表現的身体

「すでに多くの人に通した行為から生まれ、すでに私的世界であることをやめた感覚的世界に根をおろしている」、「人間が世界のなかで他者を光景の一部として知覚する事実によって、コミュニケーション以前にすでに与えられていたコミュニケーションの萌芽」である「最初のパロール」の考察に際してメルロ＝ポンティが注目したのは、なぐり描きから始まる乳幼児のデッサンである。それは、他者が光景の一部である自他未分化な意識に亀裂が入るかのごとくに、他者と共有可能な「表現」が輪郭を得たことでありつつ、自身とのコミュニケーションでありつつ、他者とのコミュニケーションである。出現したデッサンは自ずから現前を越える。今現在の多数の人たちが同時にまなざすことも、今以後の自分自身も含む無数の人たちがまなざすこともできるからである。デッサンのこの特性に乳幼児は魅せられ、描くことへと駆り立てられていく。メルロ＝ポンティは、乳幼児がひとつの平面に、複数の空間的視点からの展望を入れ込み、複数の時間的・物語的内容を描き込んでいくことにも注目し、そうした絵を、西欧近代の遠近法に至る途上の未熟な絵とみなすべきではないと言う。空間的にも時間的にも間主観的で、共時性と通時性に開かれた描かれ方であり、むしろ絵として本来的な表現に他ならないからである。こうしたメルロ＝ポンティの思索から「絵画表現的身体」のキー概念を得た。

#### 物語り

それにしても、描くことは、画材（クレヨンや紙等）が調達できて可能である。それ以前には、間身体的に体験される全体的出来事としての知覚的ゲシュタルトは、身振りでデッサンされ、時間的な他者たちとの間で共有される「ことば」となっていく。そうした経緯をメルロ＝ポンティは「制度化」と呼んだが、近年のわが国には、身振り表現を起点に人間

の空間的で時間的な言語活動を掘り下げた次のような思索の系譜がある。

大森荘蔵は、「身振り」の全体のなかに、五体を動かして相手に触れて動かす「体振り」、視線を活用して相手に触れて動かす「視振り」、声を活用して相手に触れて動かす「声振り」があり、あくまでも「身振り」の全体性のなかでこそ音声活用は実現している、と論じた（大森荘蔵『物と心』筑摩書房、159 - 161 頁）。「振れる＝触れる＝ふれる」は、主体が客体を一方向的な支配下に置くことは異なる、間身体的な人間観を反映した語である。間主観的な身振りが相手を動かすありさまを、さらに坂部恵が、「人間の＜ふるまい＞のレベルの系列における一種のふり」である「かたり」として考察する（坂部恵『かたり - 物語の文法』筑摩書房、52 頁）。そして野家啓一は、「かたり」が共時的かつ通時的な「物語り行為」として自ずから進展することを記述して「物語る欲望にとりつかれた」人間のありさまを論じるに至った（野家啓一『物語の哲学』岩波書店）。こうした思索から、「物語り」のキー概念を得た。

#### (2) 絵画表現的物語りの展開を記述できる場

700 万年にも及ぶ長い人類史で、絵を描いた痕跡が確認されているのは、現生人類となったわたしたちホモ・サピエンスだけである。1940 年にフランス南西部のラスコーで発見された洞窟壁画にメルロ＝ポンティは幾度も言及している。悠久の昔から現在まで、わたしたちの世界は、絵で示し得て名前を有するモノやコトによって物語られて続けてきた。新しく生まれる子どもたちは、絵に親しみながら、「ことば」に開かれている者として、おとなたちから歓待される。そうしたおとなたちとの関係のなかで「見られるものとして見る」身体として目覚め、自身の絵画表現的身体を活性化して、物語り始める。しかしながら、莫大な労力を経て獲得された喉の有効活用による「聴かせることば」が直接的コミュニケーションの手だてとして一般化した現代社会では、その事実が見え難くなっている。逆説的ではあるが、声を発しない成人ろう者とろう児の全身体的な「見せることば」の交流にこそ、人間がことばに開かれて在ることの根源的かつ典型的なありさまを、見いだせるだろう。そうしたありさまが観察可能なのは、ろう児たちが自らの絵画表現的身体を、成人ろう者の絵画表現的身体との間で活性化して物語りの世界に入ることを援助する保育環境が構成された場である。それは、保育者集団の中核をろう者が担い、ろう者を聴者がサポートするシステムが整えられた場でなければならない。西岡は僥倖に恵まれ、そうした希有な場である S ろう学校幼稚部にフィールド・ワークに入れる機会を得た。集中的に参与観察できた 2015 年 9 月から 2017 年 3 月までの 1 年と半年間、約 20 名の保育者の内、30 代女性の S と男性の T が、デフ・ファミリーに生まれて日常言語と

しての手話を獲得した「ネイティブ・サイナー」のろう者であり、共にクラス担任として勤務している。さらに、聴者であるが、両親がろう者であることから手話を第一言語として育った20代女性も1名、勤務し、各年代の聴こえる保育者たちも手話が堪能である。3、4、5歳児総計で10数名。ろう・難聴以外の障害も併せ持つ幼児と、併せ持たない幼児がいて、別々のクラスに在籍するが、基本的に、どの保育室への出入りも自由であって、一緒に遊ぶ。西岡は、毎月、連続する数日間に互って、終日の日常の保育を参与観察した。西岡は手話初心者であったが、手話に堪能な聴者からのサポートも受けつつ、毎回の保育記録・感想をメールで届け、筆談を通してSとTと意見交換し、研究を進めることができた。

#### 4. 研究成果

(1) 現象学的記述の諸事例(参与観察であるので「わたし」と一人称で記述する)

ろう児たちの絵画表現を導く、Sの保育室の空間的環境構成

Sろう学校幼稚部は、高等部まである4階建校舎の1階部分であり、美しく繁った樹木に囲まれた園庭に面している。2015年度、保育者Sは4歳児5名のクラス担任であった。台風が去って小雨降る9月上旬のある日、初めてSの保育室を訪れた時、わたしは森の草原に開け、大雨や風を避る、ほの暗い(ラスコーの)洞窟に足を踏み入れたような気がした。室内は、ろう児たちが園庭で体験した「リアル」をクラスのみで共有できる「バーチャル」の「絵」に転換することを誘う導線環境構成されていた。導線の始まりと終わりとの2箇所に絵を掲示する場がある(以下、Aコーナー、Bコーナーと表記)。

Aコーナーは園庭から戻って室内に入るドアのすぐ横、園庭の草原を隅々まで見晴らせる明るい窓際にある。綿棒、黒い絵の具、小さい白紙が用意されている。これらを用いたシンプルで力強いタッチの絵が、数枚、隣接するホワイト・ボードに貼られていた。一匹の虫を真上から見つめて描いた絵が多い。虫の輪郭を切り抜いて、四角い紙を楕円形にしたものもある。つかまえてきた虫をそのまま標本にしたかのような絵である。

この場所から時計右回りに歩むと緑の黒板。その趣は、洞窟内の苔むした岩壁である。岩壁の下には、紙でつくられた草花が据えられ、寝そべることができるマットが敷かれている。探検の余韻を味わうバーチャル・ミニ草原のようである。子どもたちが虫や蝶へ変身する羽グッズ、さらに、変身した虫や蝶を追いかけて使う、保育者S手製の虫取り網も、直ぐに手に取れるよう、置かれている。ここから、さらに壁づたいに時計右回りの奥へと進んだ場所には、絵本コーナーがある。背丈の低い本箱の上に、カマキリが描かれた絵本が表紙を見せて展示され、その横に、虫かご

も置かれている。この絵本コーナーの位置は廊下に面した保育室前方のドア付近になる。絵本コーナーは、落ち着いて読書することを保育のねらいにするときには、壁に囲まれた角に設置するのが一般的であって、出入りの多いドア付近は避ける。しかしこの9月、子どもたちが園庭へのドアを出入りする頻度に比較して保育室前方のこのドアを通過することの少なさを勘案したSは、園庭を起点にする導線を大切にすることを趣旨で、ここに絵本コーナーを定めたのであろう。

この絵本コーナーと直角に、絵を展示するふたつめの場所Bコーナーが隣接する。そこは本来は廊下への窓である。が、大胆にも数枚の大きな模造紙を貼られて窓の機能は無化され、子どもたちが描いた大小さまざまな、虫の絵、花の絵、人の絵が溢れていた。

保育者Sは楽しそうにわたしに説明してくれた。明るい窓際のホワイト・ボード(Aコーナー)は、描いたばかりの絵をそのまま家に持ち帰るかどうか、子どもが自分で決めるために、1日だけ留めておく所。廊下側の複数枚の模造紙(Bコーナー)は、みんなに見てもらうことに決めた絵を展示するギャラリー、と。

その日の子どもたちは小雨などなんのその、ロッカーにカバンを置くや否や園庭に飛び出して探索に明け暮れた。時折、室内に帰ってきては、バーチャル・ミニ草原に寝ころび、図鑑をめくったりして、また出ていく。詳細は紙幅の都合で割愛しなければならないが、その後、季節に応じて変化する戸外での体験を描くことへ導くSの保育室の環境構成は変化し続けた。子どもたちは、話すように大量に描いて鑑賞し合っていく。絵が、パロールにして原エクリチュールであるありさまが、繰り広げられていったのであった。

絵画表現的身体間で共有する身振り表現を導く人的環境としての、Tのふるまい

ある日、聴者の両親の元に生まれ、まだほんの少しの手話しか知らない、ろうの女の子Kちゃんが、初めて登園した。4歳であるが、体力訓練の施設で多くの時間を費やさねばならず、まだ2歳くらいにしかみえない体つきである。その日、ずっとKちゃんに付き添って過ごしたのは、男性保育者Tであった。手を支えて一緒にゆっくりと廊下を歩いて遊戯室に案内し、園庭側の窓辺に並んで腰をおろす。室内で遊んでいる子どもたちをじっとみつめるKちゃんのまなざしにT自身のまなざしを重ねて、「Sちゃんだよ、Aくんだよ……」と、ひとりひとりを指さし、手話での名前(サイン・ネーム)を伝える。Kちゃんは、活発な子どもたちのようすがおもしろくて、顔をほころばせる。その気持ちをTも共有して、一緒にうなずき微笑みあっていた、その最中。急に、やや強い日差しが、窓から室内に差し込んだ。Tは目をまばたかせながら、日差し側の手を顔の横に持ち上げて、あるしぐさをした。それは、日差しを遮

る反射的な身振りのようでありつつも、それだけではない、日差しのまたたきが「絵」として描かれたようなしぐさであった。手話初心者のわたしには未知なしぐさであったのに、見えたたとん、心の中に「まぶしい」という声が響く。その時のKちゃんはただTを見上げていたが、その後、自分でもそのしぐさをするようになったこと、そしてそのしぐさの意味は確かに、「まぶしい」であることを、わたしはTから伝えられた。晩年のメルロ＝ポンティがメタフォリックに語ったことにならば、この世界の陽光が、世界に臨在する身体である人間に射し入ることで折れ返って「表現」になった。TとKちゃんに間主観的に知覚されていた光景のなかで「見せることば」としての共有される身振りがおのずからその輪郭(カタチ)を得た。身体的パロールが原エクリチュールであるありさまに他ならないだろう。

戸外で共有されたリアルから絵本を契機にするバーチャルな物語り空間の充実へ

みんなの視界に入る園庭の一角に、実際の「火」をおこす小さなかまどが据えられ、食材を調達しては、かまどの前で、切り、火を使って煮炊きすることが始まった。重度の重複障害の子も興味をかきたてられてやって来て、自分のペースで協力して調理する。こうした過程で子どもたちから自然に手話が多く出てくるようになり、その手応えを保育者たちが実感として共有したことから、園庭での煮炊きは、この年度には、なんと、10月中旬から2月上旬までのほぼ毎日、天候により給食の前になったり後になったりして続けられた。この場所での煮炊きは伝統となり、次年度にも繰り返し行われてその年度の冬、園庭でリアルな「火」の体験を共有するからこその出来事が、展開していくのである。

2月末の(木)(金)にわたしがTの保育室を訪問すると、いもとうようこ作の『3びきのこぶた』が絵本立てに置かれて、ごっこ遊びの真っ最中だった。聞くところによると、週の初めに、Sちゃんが別の部屋でダンボールの家をみつけて4歳児クラスに持ち込み、Tくんが「Sちゃんと結婚して一緒に住む家をつくる」とおお張り切りになって、ふたりしてその家を改築し始めた。この偶然に便乗して保育者Tは、屋根に煙突をつけ、壁面に数枚の茶色の色紙を貼りつけて「れんがの家」風にした。さらに「木の家」風、黄色のビニールひもをたなびかせる「わらの家」風の家も子どもたちと一緒に造った。そして絵本『3びきのこぶた』を手話語りし、キャラクターに変身できる「帽子」を持ち出し、自身がおおかみ、子どもたちが子ぶた役になるごっこ遊びが始まったのだった。

木、金と観ているうちに、Kちゃん、Kくん、Tくんが子ぶた役に定着した。Kちゃんは、普段は手をささえられてゆっくり歩くが、にこにこ笑いながら「ハイハイ」の姿勢で機敏に動き回り、かわいい子ぶた役を楽しんで

いる。Kくんは、保育者がどのように勧めてもみな楽しそうに遊ぶ環に入らないこともあるが、今回は、ちゃんと子ぶた役でふるまうどころか、さらに、逃げるおおかみのおしりに、ゆるゆるとやけどの「くすり」を塗り込むしぐさまでしている。それは、絵本の頁にあるシーンではなく、Kくんが自分で始めた、と、わたしはTから伝えられた。Tくんは、日頃から保育者Tと仲間同士の雰囲気快活に遊ぶ子である。子ぶた役を勤めるだけではなく、保育者Tが演じるおおかみの登場や家を吹き飛ばすタイミングを、Tの横に立ってカウントダウンする。このように子どもたちは、追われるスリルを楽しむだけでなくバーチャルな物語りを共有的に再構成することに興じている。

わたしはTに、絵本『3びきのこぶた』の手話語りの再現を頼み、なるほど、と関心させられた。聴者が手話で絵本を読み聞かせる時、行いがちであるのは文章の逐語的な手話訳化である。だがTはそうではなく、絵を読み聴かせる。絵から、状況を説明するナレーション的表現と、登場者間のやりとりの表現を抽出し、絵に潜在する物語りを表現していく。結果的に絵本の文章にも近くもなるが、文章の手話化とは異なる。端的な例をあげれば、こぶた三兄弟をTは絵にそくして、青い子ぶた、黄色い子ぶた、赤い子ぶた、と、表現する。こうして指さしと視線と姿勢の全体で子どもたちを絵本の絵に誘導して絵の細部にも着目させていく経緯に、Tは、自分自身を登場者に変身させるふるまいを交える。最も際立たせるのは「おおかみ」への変身である。そう、確かに「おおかみ」こそ、物語りを進展させる要因に違いない。おおかみが登場しなければ、絵本のなかでも保育室内でも、違う様式の3つの家がある状態が続くだけである。おおかみに焦点化されたこの物語りの面白さは、当初は強くて恐い者としてこぶたたちを追う側であったのに、最後はお尻をやけどした弱くてなさけない者として追い払われる側になる、大逆転にある。Tは、全身でおおかみの変容ぶりを現して、大逆転の面白さを提示した。こうしたTの前で子どもたちは、自ら子ぶたに変身して物語りのなかに入り、さらにTくんに顕著のように、物語りの反復をメタ的に楽しむ意欲を駆り立てられずにはいられなかったのであった。

翌週の水曜日、遊戯室で、保護者と全部のクラスの子どもたちが集う誕生会が開かれ、このごっこ遊びが披露された。「誕生会」の翌日の木曜日にわたしはそのビデオ映像をTと一緒に観ることができた。Tは、「子どもたちが、あの狭いちょうどいい大きさの家に、友だちとギュッギュッと入るのを楽しんでいる普段の遊びのようすをそのまま見てもらう」趣旨で、保育室で用いたもの以外、一切、付け加えずに上演した。そこで、赤い布等、直接的に火を現す小道具を持ち込まずに演じることとなった。4歳児クラスには、

最終頁に赤々と燃える炎が描かれていた絵本があったから、火のイメージは子どもたちの間で共有されていたのだ。誕生会ではそうした普段どおりの遊びの披露だったので、飛び入り参加してくる子どもを迎えての展開となった。そのなごやかさを楽しみつつ、わたしは、ビデオ映像に記録されていた、子どもたちのことばの力に驚いた。

おおかみのお尻に火がついて逃げていく、劇遊び後半。こぶた3のTくんにお尻を叩かせたおおかみ役の保育者Tは、体をよじって自分のお尻を見ながら、「火、火、火がついてしまった!」と、炎を示す「親指と小指だけを立てて回す手話」で語り、いかにも熱そうな身振りで逃げていく。そして舞台奥の黒板に後ろ向きでへばりついて、お尻にKくんから「くすり」を塗ってもらうのを待っていた、そのとき。保育者Tの視界に入らない、舞台前方下手のレンガの家の窓から身乗り出したこぶた3のTくんが、観客に、次のように、手話で伝えたのである。「T(=おおかみ)は、逃げ帰っていくよ!(おしりに火がついて)真っ赤だよ!(僕たちを襲って家を壊したりするなんて)ダメだよ!ダメだよ!」と。これは、映像を見て保育者Tも驚いた、Tくんのアドリブある。クライマックスをTくんは、「ここが見どころ」と、あたかも事件現場から真に迫る報道を届けるニュース・キャスターのように実況中継したのだ。このTくんの報道を、観客である3歳児クラスの子どもたちは的確に受け止める。Tくんの手話に応じてRくんが笑う。Mちゃんは、「食材を煮炊きする時にたくさん炎が燃え上がるようすを現わす手話」をしつつ、担任の保育者(聴者)を振り返って笑う。保育者はうなずきながら「あぶないねえ」と手話で返す。その場に「火」を現す赤いモノは何もないのに、園庭でリアルな火の体験を共有してきた子どもたちは、鮮やかに燃え上がる炎について笑いながら語りあっている。「見えるもの」としてそこにあるのではない「見えないもの」(この場合に顕著であるのは、火)が、実物とは違うありかた(この場合、身体表現)で指し示されて物語りが共有され、物語りの全体がこれまでその物語りの外部にいた他者たちにもメタ的に伝達され、新たな人間関係のなかで、物語りが限りなく語り直されていく。こうした子どもたちのありさまには、身体的パロールがすでにエクリチュールであることがみいだされる。

## (2) まとめと今後の展望

ろうの保育者たちが自身を一部とする環境構成で、ろう児たちの絵画的形象化への志向の共有的喚起を導いて共に物語る日常生活を営んでいるありさまを、西岡は観察できた。また本研究の最終年度にはろう者Tを講師に招いての絵本手話語りのワークショップも開き、Tの手話語り聴こえる子どもたちにも非常に魅力的であるようすも確認で

きた。およそ人間であるわたしたちの存在の可能性の根拠としての身体のエクリチュール性を現象学的記述にもたらし、より深く具体的に考察していくことが、今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

西岡けいこ 「絵画的身体最初のパロール 成人ろう者がろう児に物語るありさまから考察する」、日本倫理学会第68会大会、日本倫理学会、弘前大学、2017.10、国内、一般研究発表、査読有、哲学・倫理学

西岡けいこ 「S ろう学校幼稚部の実践にそくして考える「課題研究 幼児教育におけるナラティブ・ラーニングの検討」、日本教育方法学会第53会大会、日本教育方法学会、千葉大学、2017.10、国内、パネリスト

〔図書〕(計2件)

西岡けいこ 「人間は自画像としての絵画に溢れた世界を生きる身体である -後期メルロ=ポンティ絵画論の位相」、小熊正久・清塚邦彦 編著 『画像と知覚の哲学 - 現象学と分析哲学からの接近』、265頁、東信堂、2015.11、分担執筆(113-130頁)

西岡けいこ 「教育学とメルロ=ポンティ - 制度化の記述」、『メルロ=ポンティ読本』、420頁、法政大学出版局、2018.03、分担執筆(344-350頁)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西岡 けいこ (NISHIOKA, Keiko)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号: 10237670

### (4) 研究協力者

新井 孝昭 (Arai, Takaaki)

筑波技術大学・ろう難聴教育研究会